

障がい児にも空間表現の楽しさを ～アフォーダンスの視点から跳躍運動を生み出す～

研究部 笹田哲平（東大阪市立布施小）

1. はじめに

実践の背景として、S君という自閉症児を担当している中で、通常学級の児童との学習課題の乖離、1日にできる抽出授業が1～2時間程度、という特別な支援が必要な児童であるが、現状の教育課程では十分な学習保障や発達保障ができていないことに疑問を抱いていた。その中でも体育という教科は通常学級の児童たちとの学習課題の差が大きく、既存の教材や教具ではS君が「できた！」と思えるような経験がこれまでほとんどなかったのが現状であった。しかし、跳び箱という教材がこれまでになくS君の動きを引き出してくれたことをきっかけに、「アフォーダンス」という理論を現場実践に活用することによって、S君のさらなる可能性を引き出すことができると考えている。



2. 子どもについて

- S君 自閉症児 ※当時6年生
・発達段階7歳前後

- ・飛び降りや飛び乗りも一人でできる
- ・普通の体育ではクラスの子どもたちと同じ課題できず、別課題をしている
- ・極度の運動嫌い（怖がりな性格）
- ・言葉数は少ない
- ・局所的なこだわりがある

3. アフォーダンス

アメリカの知覚心理学者ジェームズ・J・ギブソンが提唱。

- ・環境が動物に提供する「価値」のこと（良いもの・悪いものも含め）
- ・英語のアフォード(afford)「～ができる、～を与える」からできた造語
- ・「すり抜けられる隙間」、「登れる段」、「つかめる距離」はアフォーダンス
- ・「物体、物質、場所、事象、他の動物、そして人工物など環境の中にあるすべてのものはアフォーダンスをもつ」
- ・例えば、、、「隙間」
- ・同じものを見ても、人によって異なるアフォーダンスが知覚される
- ・「刺激」のように押しつけられるのではなく、「情報」を知覚者が「獲得し」、「発見する」もの

4. なぜ跳躍運動か？

自閉症児が持つ（自己）感覚刺激運動にもいろいろあるが、双子とも「ジャンプ」することを普段の学校生活の中でもよくしている

姿を目にした。例えば、階段の最後の一段をジャンプして降りる、手すりを持って両足ジャンプで階段を上る、嫌いなラジオ体操でも「その場ジャンプ」だけはする、など。

普段の体育では体操服を着ているものの、ほとんど参加できておらず、満足に運動できた経験がこれまでも非常に乏しい。そんな中、5年生になって最初の跳び箱の授業でこれまでにないほど跳び箱という教材に取り組んだ姿から、子ども自身が好んでする動きと跳び箱（またはそれに近い自作教材）を掛け合わせた跳躍運動で空間表現の楽しさを味わってもらいたいと考えた。



水たまりをジャンプして飛び越える様子

5. S君と跳び箱の出会い

5 - ①. 5年生での跳び箱の授業

5年生になり初回の跳び箱の授業が行われたとき、体育館に入った瞬間、並べられている跳び箱を見たS君は目をキラキラさせながら跳び箱の周りを走り回っていた。普段の体育は、ほとんど座り込んだまま授業に参加することさえなかったS君だが、この時の様子はいつもと違った。S君を跳び箱の前に誘ってみると、しばらくの間、跳び箱に両手を置いた状態で体を左右に揺らしていた。

（跳び箱ってどうやるんだったかなあ。。）

発語が少ないS君の心の声が聞こえてきたよ

うにその時は感じた。この時点で、跳び箱がS君に与えるアフォーダンスはまだ発揮されていなかったのではと推測している。どちらかということ、S君が中学年の時にも跳び箱の授業をしているはずなので、これまで自分がやってみた、あるいは友だちがやっているところを見ていたという経験則からきたS君の動きではないだろうかと考えた。その証拠に、S君はしばらく考えた後、足をゆっくりと跳び箱の上にかける動作をして、最終的に跳び箱の上にもたがるような形で座るところまで自分でできた。その後はなんと、両手で支持しながら前方にすり寄って、マットの上に着地しようとした。しかし、最後のところで両手で突き放すという動作が難しく、恐怖感もあったのか、目の前にいた私に『こわい』と一言漏らした。去年同じクラスだった子どもに跳び箱の授業でのS君の様子を聞くと、前述したような動作を同じようにできていたという。そして最後は、支援担任に背中を押ししてもらい、マットの上に着地して「開脚跳び」として評価をつけていたようだ。しかし、普段の体育ではほとんど参加してくれないS君が、目をキラキラさせ自分から取り組む姿を見て、開脚跳びにこだわらない跳び箱の取り組み方次第で、新たにS君が跳び箱の楽しさに気づいてくれるのでは考えた。



縦向きの跳び箱を前にして

5 - ②. 跳び箱の向きが変わると

・横向きの跳び箱に対して

私は、現状の跳び箱ではS君の運動的資質との乖離が大きいと感じた。要するに、S君にとって開脚跳びはそもそも難しすぎるのである。私は、以前からS君が好きな常同行動の一つとして「ジャンプ」があることをつかんでいた。運動嫌いなS君でもトランポリンはすることがあり、また階段の最後の段から飛び降りて着地するといった動きを学校生活の中でもよく見せてくれていた。跳び箱をそれらのようなジャンプ台として見立てれば、S君の好きな「ジャンプ」「飛び降り」という動きが引き出せると考えた。そこで私は、縦向きの跳び箱を横向きにし、段数も3段にしてできるだけ恐怖感を感じない高さに設定した。そして、その跳び箱にS君を誘ってみると、片足ずつ跳び箱の上に乗って立ってみせてくれた。するとS君は跳び箱からマットの上へ飛び降りて見事着地を決めることができた。その時のS君の顔は満足気な表情そのものであった。その瞬間、「これだ！」と私はS君の跳び箱への取り組み方の方向性が見えたと実感した。それ以降、S君は跳び箱からジャンプしたときの楽しさや面白さを見出したのか、この日の体育では45分間一度も休む



横向きの跳び箱では上に乗ることができた

ことなく、あらゆる高さの跳び箱の上に乗って、そこから飛び降りるということを繰り返していた。これは、これまでの体育の授業では見られなかった姿であったので、学級担任やクラスの子どもたちも驚き、しきりに声をかけてくれていた。

5 - ③跳び箱の向きの違いから分かること (アフォーダンスの視点から)

S君がいきいきとして取り組んでくれた授業の日から数日後、跳び箱の授業があと1回しか取れないことが発覚した。そして満を持して、2回目（最後）の跳び箱の授業にS君が臨んだとき、クラスの学習課題が台上前転に移っていたため、跳び箱がすべて縦向きに変わっていたのである。私も少し面くらったが、S君は前回同様に縦向きの跳び箱に対しても果敢に向かっていった。跳び箱の上へ乗り、飛び降りる態勢に入ると思いきや、S君の口から『こわい』という言葉が出た。私がS君のところに駆け寄ると、S君は私に両手を伸ばしてみせた。S君の両手を握って「3・2・1・ゴー」の合図とともにマットの上へ飛び降りることができた。発語が少ないS君が『こわい』と言えたことは私にとって少し驚きであったと同時に、それほど段数も高くない跳び箱に対してなぜ『こわい』という言葉が出たのかを考えた。ここにアフォーダンスの視点が見てとれる。進行方向に対して横向きの跳び箱は、運動者に対して、十分な足の踏み場が確保されていることを提供していると考えられる。またS君は、跳び箱の上に乗る際に、足をかけた両サイドの空いた跳び箱のスペースに両手をかけることができていた。これは、恐怖心の強いS君でも安心して「跳び箱の上に乗ることができる」ことの価値提供をしているからと考えて相違はないの

ではないだろうか。さらに、跳び箱の上から飛び降りる際に、膝を十分に曲げているS君の動作を見ていると、横幅が狭い縦向きの跳び箱だとそれができないことが分かる。これらの点に関して、縦向きの跳び箱はS君にとって恐怖心を生み出させる要因になったのでは考える。つまり、横向きの跳び箱だからこそ、S君は「跳び箱の上に乗る、そこから飛び降りる」という価値を受け取り、S君自身が空間表現を楽しんでいるように感じられた。

5 - ④初めてセーフティーマットを使う

S君が6年生になるにあたり、私も持ち上がりでS君を担当することになった。6年生でも当然に跳び箱の授業があったのだが、学校現場の忙しさか、体育を軽んじられているのか、5年生の時同様に2回しか跳び箱の授業が行われなかった。しかし、6年生では新たなS君の動きが引き出された。当時の学級担任がセーフティーマットを出してくれていたため、S君をそのマットに誘ってみた。はじめは、跳び箱の上で座り込みしばらく考えこむ様子が見られたが、しばらくしてジャンプすると、マットの上に着地した瞬間に大の字になるように体を広げたS君。もちろん初めてセーフティーマットを見たS君は、はじめ戸惑いもあったようであったが、体を放り出しても大丈夫という安心感をセーフティーマットから受け取っていた。この「飛び込む」という動きもS君にとって楽しいものになり、それ以降、何度も跳び箱の上からセーフティーマットにダイブしていた。普通のマットを敷いた状態では飛び降りることができないような高さの跳び箱からでもジャンプすることができた。跳び箱の授業が終わってから、支援学級に跳び箱とセーフティーマットを持ち込んで、教室に来たらいつでもできるような

環境を作ることにした。今では教室の半分のスペースを跳び箱とマットで占めている。



支援学級にもセーフティーマットを敷いて

6. 一次空間を生み出すために

5年生、6年生の跳び箱の授業での様子から、これまでは跳び箱の上に乗った状態でその上から飛び降りるという動作が中心であった。それは跳び箱の空間表現における、「二次空間」にあたる点だと考えるが、そこからもう一步踏み込み、「二次空間」の前段階である「一次空間」を生み出すことはできないだろうかと考えるようになった。実際、体育の授業でもS君はその片鱗を何度か見せてはくれていた。しかし、それ以降は着手できていなかった。「一次空間」を作り出すことで、よりS君が空間表現を楽しんでくれるのではないかと感じた。S君にとって、「二次空間」は「飛び降り」であるならば、その前段階の「一次

空間」は「飛び乗り」であると考えたが、既存の飛び箱では難しいと思い、S君専用の教材を作ることにした。当時、たまたま大量のEVAマットが余っていたため、それを半分に切り、何枚も重ね、疑似飛び箱を作った。そして、S君がトランポリンを使うことができるということから、ロイター板の反動も使えるということをつかんでいたため、ロイター板からEVAマットへの飛び乗りという「一次空間」を生み出すことができた。最初は教師の手を握って飛び乗っていたが、徐々に自分一人だけでできるようになっていった。

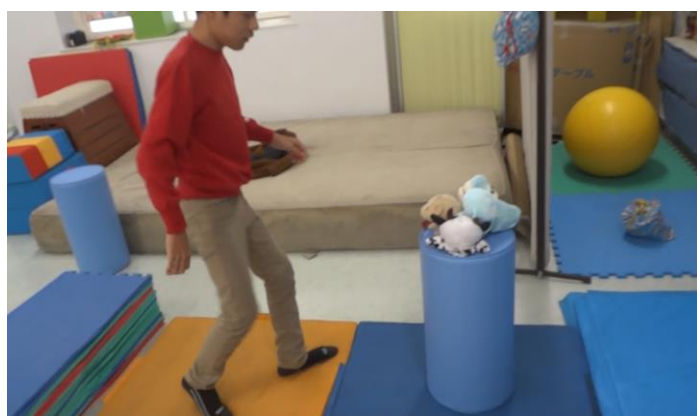
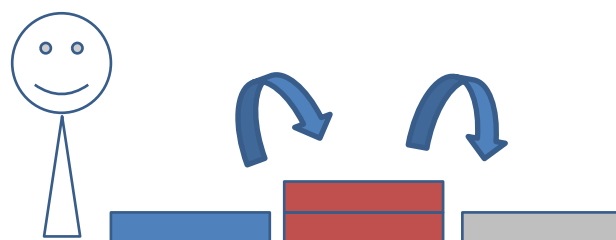


4段の飛び箱の上からマットにダイブ

7. 子どもが自ら動き出すように

普段のS君の体育の授業での様子から、なかなかS君自身が動きだそうとしないのには必ず本人なりの理由があると今では考えるようになった。もちろん、運動に対する苦手意識や好き嫌いもあるかと思うが、特にS君のような自閉傾向の強い子どもには、行動するに対しての強い必然性が伴ってくると実感しているところである。子ども自身が「なぜそれをしないといけないのか?」「なぜそれをする必要のあるのか?」ということが納得できていないと、自ら動き出そうという気持ちにはなかなかないのではないだろうか。S君も同様に、教師のマネをしてもらうように

言っても全くの無視、無理強いさせようものなら必死の抵抗など、強制させることでS君自身が得るものは無いに等しかった。そんなS君が支援学級で飛び箱をしている中で、たまたま置いてあるクッションを敵と見立ててキックして倒したのである。それを見た私は、EVAマットの上にそのクッションを置くと、またキックしたのである。そこから、S君なりのストーリーができあがり、ジャンプして進み、敵(クッション)を倒し、ゴールした先に置いてあるぬいぐるみを救出するという流れが生まれた。ただ単にジャンプして進むだけならば、S君にとっては必然性があまり無いかもしれないが、敵を倒して仲間を救うという「目的」を自分で作りだしたことで、自分から動き出すようになっていった。



8. 「できる」を支援するきっかけとしてのアフォーダンス

飛び箱だから「開脚跳び」をさせる、ということだけにこだわり過ぎていたらS君の新たな動きは見つけられていなかったであろう

し、アフォーダンスという考え方もなければ、もう一步踏み込んだ領域にはたどり着けなかったかもしれない。今、通常の学校・学級でも手厚い支援を必要とする児童が増えていることは現実としてあり、その子どもたちが必要な支援を受けられているかはまだまだ疑問視されなければいけない点である。当然に人的支援の課題もあるが、教師自身が固定概念を崩すところから始めていく必要があると考える。この跳び箱という教材一つとっても、子どもの「できる」「わかる」のためには、様々な使い方があっていいこと、既存の形にこだわらずに子どもにあった形を模索していくことも時には必要だと感じている。とはいっても、「できる」ことにこだわりすぎると、私自身も子どもが見えなくなりそうになったことがある。今、そして少し先の将来、この子にとって「できる」ことを考えること、かつ運動そのものを楽しむことを大切に取り組んできた。これまで触れてきたアフォーダンスの視点は決して私自身も万能であるとは思っておらず、あくまで、子どもの「できる」を支援する、またはステップをつくるものと捉えている。子どもによっても、環境からの情報の受け取り方は様々であり、また子ども自身の運動機能も加味されていることも常に念頭に置いておかなければいけない。しかし、それでもアフォーダンスの視点は子どもの新たな動きを引き出すきっかけとしては有効な手立てだと感じている。

【参考文献】

- 1) 佐々木正人「アフォーダンス—新しい認知の理論」(1994 岩波科学ライブラリー)
- 2) 佐々木正人・三嶋博之編「アフォーダンスと行為」(2001 金子書房)
- 3) 榊原義夫「体育におけるアフォーダンス

論の可能性—理論と実践的研究その後」

(2018 体育同志会大阪支部機関誌 KICK OFF 第47号)

4) 「チョコちゃんに叱られる」 NHK 2019年9月20日(土)放送